



昭和二十八年一月二十日 初版印刷  
昭和二十八年一月三十日 初版發行

昭和文學全集 6

小林多喜二  
中野重治  
徳永直集

著作者

小林多喜二  
中野重治  
徳永直

發行者

角川源義

印刷者

中内佐光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

東京都千代田區  
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八  
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社  
クロース 日本クロース工業株式會社  
印刷所 曉印刷株式會社  
製本所 鈴木製本所

小林多喜二  
中野重治

德永

直集

昭和文學全集  
角川書店版





目次

卷頭寫眞（小林多喜二・中野重治・徳永直）

小林多喜二集

筆蹟

防雪林

蟹工船

黨生活者

年譜

中野重治集

筆蹟

汽車の罐焚き

空想家とシナリオ

歌のわかれ

年譜

三九五七

二五  
三三  
一七〇  
一七

徳永直集

筆蹟

太陽のない街

はたらく一家

八年制

年譜

解説

窪川鶴次郎

三七

三七

三六

三九

二五

小林多喜二集

# 防雪林

北海道に捧ぐ

稿

防雪林

防雪林

防雪林

防雪林

防雪林

一。

十日

十月の末地つた。

是の日、夜に氷雨ひやまが、右脇のたゞり平岳に横たひ、  
 に降つてゐた。何處をえなうて、何人にもたつた。電燈柱の  
 一列如く、こまむも後りて行つて、マツの楯かざりにやうになら  
 せしを水かええなくあつても、奇を平むあり、何人にも眼の  
 卵慮たまごになるものかたつた。所は帯のやうに立つて、おろ  
 ぶぶらか雨と風とをうけて、揺れてゐた。雲か低く垂れ下  
 きて、おろしに暗くあつてゐた。鳥か何れ因草いんそうで在やうに  
 飛ぶやうに、夕しを水かも飛ぶみの、おろしに暗くあつてゐた。



# 防雪林

一

十月の末だつた。

その日、冷い氷雨が石狩のただッ広い平原に横なぐりに降つてゐた。

何處を見たつて、何んにもなかつた。電信柱の一行がどこまでも續いて行つて、マツチの棒をならべたやうになり、そしてそれが見えなくなつても、まだ平であり、何んにも眼に邪魔になるものがなかつた。所々帯のやうに立つてゐるポプヲが雨と風をうけて、揺れてゐた。一面に雲が低く垂れ下つてきて、「妙に薄暗くなつてゐた。鳥が時々周章てたやうな飛び方をして、少しそれでも明るみの残つてゐる地平線の方へ二、三羽もつれて飛んで行つた。

源吉は肩に大きな包みを負つて、三里ほど離れてゐる停車場のある町から歸つてきた。

源吉たちの家は、この吹きツさらしの、平原に、二、三軒つづ、二十軒ほど散らばつてゐた。それが村道に沿つて並んでゐたり、それから、ずつと畑の中にひっこんだりしてゐた。その中央にある小學校を除いては、みんな

などの家もかやぶきだつた。屋根が變に、傾いたり、泥壁にはみんなひゞが入つたり、家の中は、外から一寸分らない程薄暗かつた。どの家にも申譯程位にしか窓が切り抜いてなかつた。家の後か、入口の向ひには馬小屋や牛小屋があつた。

農家の後からは心持ち土地が、石狩川の方へ傾斜して行つてゐた。そこは畑にはなつてゐたが、所々に、石塊や、赤土や砂と一緒にムキ出しにころがつてゐた。石狩川が年一回——五月には必ずはんらんして、その時は、いつでもその邊は水で一杯になつたからだつた。だから、そこへは五月のはんらんが濟んでからでなくては、作物をつけなかつた。畑が盡きると、丈が陸迄位の草原だつた。そして、それが石狩川の堤に沿つて並んでゐる雑木林に續いてゐた。そこからすぐ、石狩川だつた。巾が廣くて底氣味の悪い程深く、幾つにも折れ曲つて、音もさせずに、水面の流れも見せずに、うね／＼と流れてゐた。河の向うは砂の堤になつてゐて、やつぱり野良が續いてゐた。こつち同様のチヨコレートのやうな百姓家の頭が、地平線から浮かんでぼつぼつ見えた。雄鶏が向うでトキをつくると、こつちの鶏が、それに答へて、呼び交はすこともあつた。

源吉は何か考へこんで、むつしりして歸つてきた。通つてくるどの家も、焚火をしてゐるらしく、窓や入口やかやぶきの屋根のスキ

間から煙が出てゐた。が、出た煙が雨のために眞直ぐ空に上れずに、横ひろがりになびいて、野面にすれ／＼に廣がつて行つた。家の前を通ると、だしぬけに、牛の口をく巾廣い聲がした。野良に放しつてある牛が口をもく／＼動かしながら頭をあげて、彼の方を見た。源吉が、自分の家にくると、中がモヤ／＼とけむつてゐた。母親が何か怒鳴つてゐるのが表へ聞えた。すると、弟の由がランプのホヤをもつてけむたさに眼をこすりながら、出て來た。眼の廻りが汚く輪をつくつてゐた。

「え、糞母！」悪態をついた。

源吉はだまつて裏の方へ廻つて行つた。

由は裂目が澤山入つて、ポロ／＼にこぼれる泥壁に寄りかゝりながら、ランプのホヤを磨きにかゝつた。ホヤの端の方を掌で押へて、ハア／＼と息を吹きこんで、新聞紙の圓めたの中に入れてやつて磨いた。それを何度も繰り返した。石油ツ臭い油煙が手についた。由は毎日々々のこのホヤ磨きが嫌で／＼たまらなかつた。由がそれを磨きにかゝる迄には、母親のせきが何十邊とどならなければならなかつた。それから、由の頬を一度はならなければならなかつた。

「え、糞母。」由は、磨きながら、思ひ出して、獨言した。

「由、そつたらどこで、今迄なにしてるだ！」  
「今いくよオ！」さう返事をした。「え、糞ち、」

母親は、へつつひの前にしやがんで火をブウ吹いてゐた。髪の毛がモシヤ／＼となつて、眼に煙が入る度に前掛でこすつた。薄暗い煙のなかでは、せきは人間ではない何か別な「生き物」が這ひつくばつてゐるやうに思はれた。へつつひの火でその顔の半面だけがめら／＼光つて見えるのが、又なほ妻かつた。由が入つてくると、

「早く、ランプはつけられ！」と云つた。

由は煙いのと、何時ものむしやくしやで、半分泣きながら上つて行つて、戸棚の上からランプを下した。涙や鼻水が後から後から出た。ランプの臺を振つてみると、石油が入つてゐなかつた。

「母、油ねえど。」

「阿呆、ねがつたら、隣りさ行つてくるべ、糞たれ。」

「じえんこ(錢)は？」

「兄が貰つて行け。」

「隣りの大おつかねえでえ。」

由はランプの臺を持つたまゝ、母親の後にウロ／＼して立つてゐた。せきは臺所にあげてあるザルの米を、釜の中に入れた。

「行げたら、行げ。」  
由は、なぐられると思つて外へ出た。

「兄——」さう呼んでみた。

それから裏口に廻りながら、もう一度「兄——」と呼んだ。源吉は裏の入口の側で茶色

のした網を直してゐた。きまつた間隔を置いておもりを網につけてゐた。

「兄、じえんこ——油ば貰つてくるんだ。」

源吉はだまごつて、腰のポケットから十錢一枚出して渡した。由は一寸立ち止つて、兄のしてゐることを見てゐた。

「兄、あのなあ道廳の人來てるツて、入江の房云つてたど。」

「何時？」

「さつき、學校だよ。」

「何處さ泊つてるんだ？」

「知らない。——」

「馬鹿。」源吉は一寸身體をゆすつた。

「房どこで、んだから、網かくしたツて云つてたど。——兄、こゝさ道廳の人でも來てみれ、これだど。」由は、後に手を廻してみせた。

「——馬鹿。——行け、行け！」

由が行つてしまふと、源吉は、獨りでにやりと笑つた。それから巾の廣い、厚い肩をゆすつて笑つた。

日が暮れ出すと、風が少し強くなつてきた。そして寒くなつてきた。一寸眼さへ上げれば、限りなく廣がつてゐる平原と、地平線が見えた。その廣大な平原一面が暗くなつて、折り重なつた雲がどん／＼流れてゐた。

暗くなつてから、源吉は両手で着物の前についたゴミを拂ひ落しながら家の中に入つて

きた。由はランプの下は腹這ひになつて、二三枚位しかくつついてゐない繪本の雑誌をあつちこつちひくくりかへして見てゐた。

「姉、ここば讀んでくれや。」

由がさう云つて、爐端で足袋を刺してゐた姉の袖を引つ張つた。

「馬鹿！」姉は自分の指を口にもつて行つて、吸つた。「馬鹿、針ば手にさしてしまつたんでないか。」

「なあ、姉、この犬どうなるんだ。」

「姉に分らなえよ。」

「よオ、——」

「うるさいつて。」

「んだら、いたづらするど。」

源吉が上り端で足を洗ひながら、お文に、

「吉村の勝居たか？」ときいた。

お文は顔をあげて兄の方を見たが、一寸だまつた。「何しただ？」

源吉も次を云はなかつた。

「居たつたよ。」それからお文がさう云つた。

「んか……何んか云つてながつたか。」

「何んも。」

「何んも？……今晚どこさも行つて云つてなかつたべ。」

「知らない。」

源吉は上にとると、爐邊に安坐をかいて坐つた。家の中は長い年の間の焚火のために、天井と云はず、羽目板と云はず、何處も眞黒になつて、テカ／＼光つてゐた。天井からは

長い煤がいくつも下つてゐて、それが火勢や、風で、フラ／＼揺れてゐた。

臺所は土間になつて居り、それがすぐ馬小屋に續いてゐた。だから何時でも馬小屋の匂ひが家に直接に入つてきた。夏など、それが熟れて、ムシ／＼した。馬小屋の大きな蠅が、

澤山かたまつて飛んで来た。——馬が時々ひく／＼いな／＼いた。羽目板に身體をすりつける音や、前足でゴツ／＼と板をかく音がした。

家の中にはまんなかにたつた一つのランプが點つてゐた。そのランプ自身の影が、丸太で組んである天井の梁に映つてゐた。ランプが動く度に影がユラ／＼揺れた。

母親のせきはテーブルを持ち出しながら、「源、お前え何んか勝さんに用でもあるのか？」ときいた。

「何んも。」

「網の相手そんだら誰だ。」

「ん……誰でもええ。」

「道廳の役人が來てるツて聞いたで。えゝか。」

源吉は肩を一寸動かして、「役人か……」さう云つて笑つた。

「なア兄、この犬どうするんだ。」

由が今度は繪本を源吉の側にもつて行つた。「こんだこの犬が仇討をするんだべか。」

「母、ドザ（紺で、糸で刺した着物）ば仕度してけれや。」

「よオ、兄、この犬きつと強えどう。隣の庄、この犬、狼、んか弱いだつてきかねえんだ。嘘だなあ、兄。」

「これで二月も三月も魚ば喰つたことねえべよ、母。——馬鹿にしてる！」源吉はこはい聲を出した。

「んだつて、オツかねえ眞似までして……。」

「馬鹿こけや！」

母親は獨言のように何かぶつ／＼云つた。

「さあ、まんまぐべ。」

母親は焚火の上にかけてある鍋から、菜葉の味噌汁を皆に盛つて出した。「ん、お文もやめにして、まんまだ。」

由は、兄の眞似をするのが好きだつた。なるべく大きく安坐をかき、それから肘を張つて、飯を食ふ——時々、兄の方を見ながら、自分の恰好を直した。

「なア、兄、犬と狼とどつちが強えんだ。犬だなあ。」

「だまつて、さつさとけづかれ。」

せきが、芋と小豆の交つた熱い粥をフウフウ吹きながら、叱つた。鼻水を何度も忙しくすゝり上げた。

由は一杯の粥を食つてしまふと、箸で茶碗をカン／＼とたゝいてせきに出した。

「兄、芳ちゃんから手紙が來てたよ。」

「こゝにゐた時の方がなつかしいつて、そんなこと書いてるんだよ。フンだものなア、何

がこつたら所。」

お文は、本當にフンとしたやうな顔をした。又！——んだつて本當かもしれねえべよ。」

母が口を入れた。

「うそ。大嘘、こつたらどこの何處がえゝツてか。どこば見たつてなんもなく、だだ廣ろくて、隣の家さ行くつたつて、遠足みたえ

で、電氣も無え、電信も無え、汽車まで見たことも無え——んで、みんな薄汚え恰好ばかりして、みんなごろつきで、……。」

「兄、犬の方強えでなア。」

「んでさ、都會は汚れてゐると、そんなことが分る度に、石狩川のほとりで、働いてた頃のことと思ひ出されるつて。」

「んだべさ。」

「何んが、んだべさだ。こつたら處で、馬の尻ばたゝいて、糞の臭いにツつかれて働いて——フンだよ。」

「なア、兄、お文この頃駄目だア。」

せきが源吉の方を見て、云つた。

源吉はだまつてゐた。

「わしも札幌さ行きてえからつて、云つてやれば、來るどこでねえつて——そのくせ、自分であつたら行きながつたこと忘れてよ。」

外では、時々豆でもぶツつけるやうに、雨が横なぐりに當る音がした。その度にランプが揺れて、後の障子に大きくうつつてゐる皆の影をゆすつた。——延びたり、ちよんたり

した。

由は飯を食ひ終ると、焚火に、兩足を立てて、繪本を見た。小指の先程のチンポコを出したまゝだつた。

「兄、狼見たことあるか。」

「見たことねえ。」

「繪で見たべよ。」

「ん。」

「どつち強い。」

「強え方強えべよ。」

「いや、駄目——え。」

源吉は大きな聲を出して笑つた。

樹の根っこをくべてある爐の火が、節たの處に行つたせゐか、パチ／＼となつて、火が爐の外へはねとんだ。

一つが由の「朝顔の蒼つばみみたいな」チンポコへとんだ。

「熱ツ々々……!!」

由は繪本をなげ飛ばすと、後へひつくりかへつて、着物をバタ／＼とほろつた。

「ホラ、見ろ、そつたらもの向けてるから、火の神様におこられたんだべ。馬鹿。」

「糞、ううーうん、／＼、」

由が半分泣きさうにして、身體をゆすつた。

せきとお文は臺所に、ローソクを立て、茶碗などを洗つた。そこに取りつけてある窓にブツ／＼と雨が當つた。そして横にスワーと硝子の面を流れた。

「ひどくなるでア。」

お文も「兄、やめればえゝによ。」と云つた。

「俺アだち来た頃なんてみんな取りてえだけ秋味あきあじ(鮭)ばとつたもんだ。夜、だまつてれば、キユ／＼／＼つて、秋味なア河面かほさ頭かぶば出して泣くの聞えたもんだ。」

お文がくすつと笑つた。

「ん、馬鹿。ほんたうだ。をかしい世の中になつたもんだ。」

遠くで、牛がないた。すると、別な方でもないた。が、風の工合で途中でそれが聞えなくなつた。

由は仰向けになつて、何んか歌のやうなものをつたつてゐたが、

「お母、いたこつて何んだ？」ときいた。

「いたこつて来て、吉川のお父うばおろしてみたつけなあ、お父、今死んで、火焚きばやつて苦しんでるんだつて云つたよ。——いたこつて婆だべ。いたこ婆つて云つてたど。」

「ふんとか？」

「いたこ婆にやるんだつて、吉川で油揚げばしらえてたど。」

「お稻荷様だべ。」

「お稻荷様つて狐だべ。」

「んだ。」

「勝とこの芳なあ犬はつれて吉川さ遊びに行つたら、怒られたど。」

「兄、狐、犬よんか弱いんだべ。」

源吉はだまつてゐた。

「吉川の母かなし／＼つて泣いてたど。眼は眞赤にしてよ。」

お文は裏の納屋のりやに提灯ていとうをつけて入つて行つた。入口のすぐ片隅に積んである俵の中へ手を入れて、馬鈴薯をとり出した。それを自分の前掛の中に入れた。鼠がガサ／＼と奥の方へ走つて行つた。提灯の影が眞暗な物置の天井に、圓く動いた。

「ホラ、芋だ。」

お文は、歸つてきて、爐邊へ前掛から芋をあけた。

「芋か——くそ、うまぐねえで。」

由はそれを仰向けに寝ながら足先で、あつちこつちへ、ごろ／＼させて、悪戯いたづらした。

「ん、この罰當り！」せきがその足を火箸でなぐつた。由は足をちぢめると、舌を出した。

「吉川でなんか、薩摩いもばくつてたど。」

「今に、見てれ、その足腐つて行くから。」

源吉は大きく兩腕を平行線にグツと上にした。鬼のやうにうつつた。

「おツかねえ。」

由が首をちぢめて、その方を見た。

源吉が振りかへつてみて、「なアんだ、馬鹿！」さう三つて、芋を二つ三つとると、爐の灰の中にいけた。



「由、あとで、焼けてから食へたえなんて云ふなよ。」

由はワザと別な方を見て、そのまゝ身體を横へごろりとこがした。

お文はランプの下に縫ひかけの着物を持つてきた。それから自分の手を、灰にかけた。

「寒くなつた。もう雪だべ。嫌だな、これからの北海道つて！ 穴さ入つた熊みたいだよ。半年以上もひと足だつて出られないんだ——嫌になる。」

「嫌だつてどうなるか、えゝ。」

「どうにもならないからよ。」

「んだら、だまつてるもんだ。」

「……」フンとしたやうに「黙つてるさ——」

由は寝ころびながら、物差をもつて、それをしのらしたり、なんだりしてゐたが、それで今度は姉の身體に悪戯し出した。初め、お文はブン／＼してゐたので分らなかつた。無意識に、悪戯された處へ手をやつた。それが由には面白かつた。何度もさうした。それから首筋に物差の端をつけた。お文は今度は氣付いて、

「これ！」と云つた。

もう一度やつた。そして、「やア、こゝに、姉の首にかたがついてるど。」と云つて、そこをつツついた。

お文はいきなりふり向くと、物差を力まかせにとりあげてしまつた。

爐邊に安坐をかいてゐた母親は、何時か頭

を振つてゐた。ランプの光で、顔にはつきり陰がつくと、急に母親の年寄つたのが分つた。

「母みたえになれば、一番えゝ。」

お文は母の方を見て云つた。

ランプの焰の工合で家が明るくなつたり、暗くなつたりした。表の泥濘を草鞋をはいて

ベチヤ／＼と通る足音が聞えた。

ねちのゆるんだ時計が八時のところでゆつくり四つ打つた。由は爐に外ッ方を向けたまま眠つてしまつた。源吉は雨工合を見るために一寸表へ出てみた。

それから源吉は自分で仕度をした。お文は仕事をしながら、時々兄を見た。

「いゝのかい？」

が源吉はだまつてゐた。源吉はすつかり仕度が出来ると、網を背負つて家を出た。雨は降つてゐなかつた。然し暗い夜だつた。彼は何度も足を窪地に落して、不意を喰つた。そんな處は泥水がたまつてゐるので、その度に思ひツ切り泥をはねあげて、顔までかゝつた。空には星が出てゐた。遠くの方で雑木林

か何かに風が當つてゐるやうな音が不氣味に絶えずしてゐた。どつちを見ても明り一つ見えなかつた。遙か東南に、地平線のあたりがかすかに極く小部分明るく思はれた。岩見澤

だつた。

彼は歩きながら、自分のこれからしてのけようと思つてゐることを考へてゐた。源吉は

何かに對して「畜生！」と獨りで云つた。彼は何べんもツバをはいた。じつとしてゐられない氣持だつた。そして、何んか、かう、自分の歩いてゐることが齒がゆくてたまらなかつた。「畜生！」

道が曲つてゐた。

そこを曲ると、二町程先きに明りが見えた。小さい窓からのランプの明りだつた。

と、七、八間後の草ムラが、急にザトと鳴つた、かと思ふと、雨が降つてきた。忽ち一面、

彼の前も後も横も雨の音で包まれてしまつた。小さい窓の明りのところだけ、四角に限

つて、雨脚が見えた。源吉が、その家の側に行くと、暗がり、急に、犬のどをうなら

せてゐる聲をきいた。彼はひよいと思ひ出して、犬の名を、その方へ見當をつけて、ひく

く呼んでみた。すると、それが止んで、足にものが當つた、犬が今度は彼の足にまはり

ついて來たのだつた。彼は二、三度犬の名を云つた。

雨のふる音が少し薄くなつたと思ふと、だ

んだんやんできた。じつとしてゐると、その

雨の音が、西の方からやんできて、今では、

東の方に移つて行くのがはつきり分つた。源

吉のところでは雨が全く止んでゐるのに、

石狩川の方に雨が降つてゐる音がした。それ

が、又だん／＼野面を渡つて、後から後から

とふり止んでゆく音が、はつきり分つた。

源吉は裏口にはまると、「勝、勝」と呼ん

だ。

家の中で誰かが立ち上つて、土間の下駄をつゝかけながら、来る音を源吉は聞いた。戸をガタガタさせてゐたが、がらつと開いた。光がサツと外へ流れ出た。入口に立つてゐた源吉に、眞向に光が来た。

「源さんか。」

「ウン、行くか。」

「行く。一寸待つてくれ。」

「どうだ。」さう云つて、一寸聲をひそめて、

「お父なんか云はねえか。」

「うん。」勝はいまに返事をした。

源吉はニヤツと笑つて、鼻を動かした。今朝源吉は、恐しがつて、嫌がる勝に、無理無理承知をさしたのだつた。彼はそのことを思ふと、をかしかつた。

「んだら、早く用意すべし。」と云つた。

一寸経つて、二人は暗い道を歩いてゐた。

「どの邊でするんだ。」

「小一里のぼるだよ。せば北村と近くなるべ。んでなえと見付かつたとき、うるせえよ。」

「道廳の役人が入つてるさうだよ。」

「んだべよ、きつと。んだから、なほ面白いんだよ。」

「……………」

「道廳の小役人に見付かつてたまるもんけ。あえつ等だつて、おツかながつてるし、今頃眠むがつてるべ。」

源吉は大きな聲で笑つた。が、だだッ廣い平原はちつとも響き返しもしないで、かへつて不氣味に消えた。

源吉は先に立つて、あまりものも云はずについてくる勝を、引きずつてどもあるやうに、グン／＼歩いてゐた。五分位歩いたとき、又雨が降つてきた。眞暗闇の廣漠々とした平原に雨がザアと音をさして降つてゐるその最中を提灯もつけずに歩くのは、勝には、然し、矢張り氣持よくなかつた。

「嫌だなア。」

「うん？」源吉はふり向いて、雨の音に逆つて、きいた。

「あまりよくねえツて。」

「何が。」

勝はてれたやうに笑つた。

しばらくしてから、

「役人は何處に泊つてるんだ。」と、勝が自分の前を歩いてゆく、がつしりした肩をしてゐる源吉にきいた。

「北村だよ。北村の宿屋だよ。——お湯さ入つて、えゝ氣持で長まつてるべ。こつから三里もあるもの、ワザ／＼こつたら雨降り、出掛けて来なべえ。」

「今朝、俺アのお母川さ行つたら、五、六疋、秋味が背中ば見せて下つて行つたツて云つたで。」

「ンか、うめえ／＼。」

それからしばらく二人ともだまつて歩いて、

勝は、大股な源吉に、急ぎ足で追ひつゝやうに歩いてゐた。

急に横で、牛が巾の廣い聲で、ないた。思ひがけないので二人ともギョツとした。

「畜生、びつくりさせやがる。めんこくもねえ牛だ！」

すると、ザウと遠くで、別な牛が答へるやうになくのが聞えた。一軒の家が横手に見えた。其處を通り過ぎるとき、思ひ出したやうに勝が、

「芳のときいたか？」と、前に言葉をかけた。勝は、芳が札幌へ行く前の、芳と源吉の關係を知つてゐた。

「うん。」源吉は面白くないことを露骨に出して返事をした。「お文も困りもんだよ。」

「……………」

二人は、そこで頭でも鉢合せしたやうに、言葉も切つた。

「勝、お前餘計なこと、お文に云ふんだべ。」

「俺？」

「うん。お前も、お文に負けなえからなあ。百姓嫌やになつたんだべよ。」

勝はまだ何も云はなかつた。

「札幌の街は見てから、夢はツかし見てるべ。」

「こつたらどん百姓が、えゝかげん嫌にならなかつたら阿呆だらう。」

「ふん。——俺んだら阿呆だなあ。」さう云ふと、勝の眼の前をふさいである肩がゆるい

で、笑ひ出した。「俺ア百姓ッ子だよ。」

勝は、何んかしら、ギョツとした。が「自慢にもならない。」さうひくゝ云つた。

「勝、お前え、芳札幌で何してるかおべでるか。」

勝は云ひづらさうに「あんまりいゝ處でないさうだつてよ。」

「淫實でもしてるべよ。」

雨が殆んどやんで、泥濘ぬかるまを歩く二人の足音だけが耳についた。

「……淫實になんかしたくねえよ。」

源吉は獨言のやうに云つた。後になつてゐる勝にはよつく聞えなかつた。

眞暗な野ッ原の夜道を三十分近くも歩いた。

「こゝから川岸に出るんだ。」

源吉は立ち止つて、本道から小さい横道に入つた。「もう直ぐだよ。」

畑と畑との間の細い道だつた。それで、兩側の雨にぬれてゐる草が歩く度に股引に當つた。そして股引が、すぐ氣持悪くぐじよゝゝになつてしまつた。

「さあ、氣をつけるべ。」源吉はさう云つて、背の綱をゆすり上げた。「まさか、こつたら雨の日に役人もあめえよ。」

「俺——」

「うん？」

「……」

「つかまつたりしたらわやだど。」

「……なんだ、おつかなくでもなつたか。」

「……」

「どうした？」

「あんまりよくねえ。」

「馬鹿ッ、元氣出すんだ。」

一寸した林の中に二人は入つた。梢越しに、空が見えた。雲が黒い、細い枝の頂上をかすめて、飛んでゆくやうに見えた。枝がゆれて、互に打ち當るそれ／＼の音が一緒になつて、變な妻味のあるうなりがしてゐた。そして半町も行かないうちに、心持眼下に、石狩川の川面が見えた。私の末の、荒模様の暗い夜に、その川面が、鈍い、然し、底氣味の悪い光をもつて流れてゐた。石狩川は晝でも、あまり氣持はよくなかつた。川の中央頃には二つも三つも、水が少しの音もたてずに渦を卷いてゐた。棒切れとか、紙屑のやうなものが流れてくる。すると、その渦卷のところ、グル／＼行つたり來たりする、と、何か川底にゐて、丁度ひつぱりこむやうに、その木屑などが渦卷の中に「吸ひこまれて」しまふ。それ等は晝でもいゝ氣持がしなかつた。勝は、今、眼下に、その音をせず、變に底氣味のわるい石狩川を見た、身體が瞬間ブルンと顫はさつた、

「渡船場だべ、こゝ？」

勝は源吉との距離をつめて、きいた。

二人は川岸に下りた。源吉は岸につないで

ある小舟に背の荷物を、どしんと投げてやつた。それから舟の端に腰をかけて、一寸の間、四圍を見てゐた。

「オイ、勝、お前なんか大きな聲で、唄ば歌へや。」源吉は煙草を出しながら云つた。

勝は、變に思つて、きゝかへした。

「なんでもえゝんだ。——まあ、先に俺一つ歌ふかなア。——なんでも、大ツきな聲で。」

スットトン、スットトンと通はせてえ——と。

今更ら嫌やとは、それア無理よ——だ、嫌やなら、嫌ぢやと最初からア——と、云えば、スットトンと通やせぬ——と、スットトン、スットトン

源吉は、しやがれた聲を、突調子もなく大きく張りあげて歌つた。それがちつとも反響もしないで、ぶつきら棒に消えてしまつた。

勝は、氣味わるく、むしろキョトンとしてゐた。

「どうしたんだ？」

源吉は、急に笑ひ出した。大きな身體をゆすつて、無遠慮に大きく笑つた。

「うん？」

笑ひをやめない。

「オイ、よせよ。」

勝は顔をしかめて、哀願でもするやうに立

13 防 雪 林





見張つてくれ。」さう源吉が、勝に云ふと、彼は、網の中を探して、丁度野球に使ふバットとそっくり同じやうな棍棒を出して渡した。勝は、それをめづらしさうに受取つて、苦笑した。

「凄いなア。」

それを、何か玩具ガムのやうにちぢりながら、砂の崖になつてゐる處をよち上り始めた。源吉はその後から、網の端の、ロープをもつて上つた。二人は平地の上に頭だけを出して、まづ、一度用心深く見廻してみた。眞暗でよくは分らなかつた。風がずうと遠くを渡つてゐた。——そしてそれが移つてゆく工合が、はつきり分つた、空は地面と區別が出来なかつた。横なぐりに降つてゐる雨が、時々ひよいと眼の前に白く光つてみえた。

「こつたらどき役人くるけア。」

源吉は、勝を立たして置いて、前から、それと決めてゐた樹の幹に、そのロープを巻きつけた。幹は雨でヌラ／＼してゐて、源吉が力一杯に結ぶと、樹皮がポロ／＼にはげて落ちた。しつかり結び終ると、今度は、兩手を幹にかけて、足場をふみならして、力一杯にゆすつた。急に頭の上で葉がガサ／＼と落ちて、バラ／＼音がして、雨滴が落ちてきた。一寸離れて立つてゐた勝が、その時、ギョツとしたやうに、源吉の立つてゐる所へ走つてきた。源吉も思はず緊張して、向き直つた。

「何んだ。」源吉は聲をひそめて、然し、鋭

くきいた。

「今の、なんだ。」勝は、周章ウラカで、どもつて云つた。

「うん？」

「ガサ／＼つての。」

源吉は、「何アーんで。」と云つて、笑つた。「んか、——何アんでえ。俺の方でびつくりしてしまつたで。」

「何んだ。びつくりしたで。」

「櫓カヌーば振つてみたんだ。水流が早えから、大丈夫かなと思つて、幹はためしてみたんだ。そつたらこつたら、その棍棒カヌーも役に立たねばよ。」源吉は笑つた。

二人は又舟にもどつた。そして、網をすつかり順序よく舟に積み直すつと、源吉は自分で舟を漕いで、勝に、網を下してもらふことにした。舟は眞直ぐ向ひ側に、力一杯に漕ぎ出された。が、さうすると、丁度結局舟は斜め下流に、カーブにかゝつて向ひ側につくことになるのだつた。

源吉は漕ぎながら、「さア、やつた。」と云つた。勝はドン／＼網を水の中になげこんで行つた。向ひ側につくと、源吉は勝に手傳はせて網の端のロープを河には後向きに、肩にかけ、網が水流に流される力に反抗して、岸の樹に結びつけた。二人の力でも、二人とも時々ヨロ／＼と後によろけたことさへあつた。それから舟を岸にあげた。

それで終つた。

二人は次の朝四時頃、こゝへ來ることにして、そこから畑道に出て、家に歸つた。

源吉が家に入つて行くと、ランプを消して皆寢てゐた。彼は手さぐりで、臺所に行つて、水瓶からひしやくのまゝ、ゴクリ／＼と咽喉ノドをならして水を二、三杯飲ノドけにのんだ。既小屋で、馬が尾毛で、ビシリ／＼と自分の身體をうつつ音がした。

二

朝の四時は、夜の九時、十時と同じやうに眞暗だつた。それよりは青みを帯びて、何處か底寒ソコサムイかつた。

川は水が増して、その勢ひで、ロープを結びつけてゐた櫓カヌーが、たわんで、ゆれてゐた。二人が家を出て、其處に着くまでは雨が止んでゐたのに、仕事にとりかゝつた頃から、又ひどく降り出してきた。

すぐに網をひきにかゝつた。その水流に逆サカつて網をひくことは、然し容易な仕事ではなかつた。二人は何度もヨロめいた。そのまゝま河の中に、ひつぱりこまればかゝつたりした。二人は息をハア／＼させて、二十分位あつた。二人は身中汗みどれになつて、それが湯氣になつて出た。それでも、やうやくひかさしてきた。さう、少しでもなると、二人は調子よく元氣づいてきて、「エンヤ、エンヤ」と掛聲をかけてひき出した。それからほとんど引かさつた。力がさう要らなくなつた。